

プロトプラズムの「魂」

— Oxford Notebooks から “The Soul of Man Under Socialism” へ —

鈴木英明

Roy Porterは、ラフ・スケッチであると断った上で、医学史の視点から見て、18世紀から19世紀にかけて知的関心の対象が身体・物質から心・精神へと移行した、と述べている⁽¹⁾。ポーターは多くの事例を挙げて説明しているが、ここではメスメリズムと人相学(physiognomy)をとりあげ、ポーターが指摘する上記の移行をたどっておきたい。まずメスメリズムだが、よく知られているように、ウィーンの医師Frantz Anton Mesmer(1733-1815)は、患者を治療する際に動物磁気という目に見えない微細な流体を用い、この物質を自らの治療法の科学的根拠とした。しかし、19世紀に入り、動物磁気が作用する患者の身体よりも患者の心に注意が向けられるようになり、動物磁気という考え方は捨て去られ、メスメリズムは催眠術へと姿を変えていく。そして、Janet Oppenheimが指摘するように、19世紀も半ばを過ぎると、メスメリズムは透視術や心霊主義(spiritualism)と密接な関係を結ぶようになるのである⁽²⁾。人相学もメスメリズムと同様の変化をとげている。伝統的な人相学は、人の性格は顔や身体に現れるという原理に基づいており、徹頭徹尾身体の表面に関わるものだった。しかし、スイスの人相学者Johann Kaspar Lavater(1741-1801)は、人の移ろいやすい表情の背後に隠された魂を見抜く精神の目を重視し、表面から深層へと向かう新たな人相学のまなごしを提示した。ポーターは他にも多くの事例を挙げ、18世紀から19世紀にかけて、知的言説を支える原理が身体や物質から精神や魂に移っていったという図式を提示している。

一方、Jonathan Craryは、古典主義の時代における「見る」主体の形象であったカメラ・オブスクーラのモデルが19世紀初頭に崩壊し、視覚が観察者の身体に帰属するようになったと述べている⁽³⁾。つまり、17、18世紀における知の秩序の中で、視覚は機械的光学により非身体化されていたが、19世紀に入り視覚は「受肉」し、視覚をめぐる科学は人間主体の生理学的構造を問題とするようになったというのである。ポーターの見取り図とは逆に、クレイリーは、19世紀における身体

の前景化を主張している。

ポーターとクレイリーの議論はそれぞれ、知的言説の歴史における別の切断面を示したのであり、互いに対立・矛盾するものではないと考えることもできるだろう。確実にいえるのは、ワイルドが活動していた時代に、精神・魂と物質・身体との対立とそれを解消しようとする動きが顕著になっていたということである。たとえば、当時は、身体から独立した不死の魂の存在を主張する心霊主義が台頭し、超常現象を引き起こす霊媒たちが耳目を集めていた。しかし、いうまでもなく、ヴィクトリア朝の価値体系において実証主義的科学が支配的な地位を占めていたこともまた事実であり、超常現象を「科学的に」説明しようとする者もいた。このような、ヴィクトリア朝における身体と魂の対立、あるいは科学と宗教・道徳との対立というテーマについては、すでに多くのことが語られている⁽⁴⁾。しかし、こうした思想史あるいは科学史の文脈においてワイルドが論じられたことは、意外にも少なかったのではないだろうか⁽⁵⁾。本稿ではまず、ワイルドがオックスフォード大学の学生時代、1874年頃にとり始めたノートブックを参照しながら、当時の、それ自体の内部に矛盾、対立をはらんでいた哲学的・科学的言説とワイルドとの交渉過程をたどる。そのうえで、「魂」を正面から問題にした“The Soul of Man Under Socialism” (1891)における“soul”という語の意味・用法を検討したい。そうした手順を経た分析によってこそ、ワイルドのテキストに類出する「魂」「soul」という語を解釈し直す可能性が開かれるように思われる。こうした作業はまた、卑俗な物質主義に背を向け、内面の領域を探求し「魂」を解放しようとした点に主たる特徴があるとされる世紀末文学においてワイルドをいかに位置づけるか、という文学史上の問題の再考につながっていくだろう。

先に述べた物質と精神との対立、あるいは科学と道徳との対立が19世紀後半においてもっとも先鋭化していた領域は、精神と身体との関係を究明する科学、いわゆる心身問題を扱う科学である心理生理学 (psycho-physiology) だった。そして、こうした心理生理学に関係する、T. H. Huxley (1825–95)、W. K. Clifford (1845–79)、J. Tyndall (1820–93) といった科学者たちの著作をワイルドが熱心に読んでいたことを、*Oscar Wilde's Oxford Notebooks* は明確に示している⁽⁶⁾。ワイルドの心理生理学への関心を示す多くのメモの中から、典型的なものを一つだけ引用したい。

The structureless semi-fluid substance called “Sarcodé”, which is the basis of

the bodies of the lowest members of the animal kingdom, was discovered by Schultze to be identical with the “protoplasm” of plants: this protoplasm is the constant basis of the varying phenomena of life and its own attribute is “irritability”[.]

The problem of science is “consciousness[.]” Is thought a property of the cerebral protoplasm in the same sense as irritability is? It is contended that as physiological activity is the property of every living cell, psychical activity must be so too and a “cell-soul” has been invented as a conception inseparable from that of life. (CB, 17)

生命の基礎は“protoplasm”という物質であるということ、さらには、人間の心の活動を支えているのもプロトプラズムのような物質であるかもしれない、ということがこのメモの趣旨だが、ワイルドが何を読んでこのメモをとったのかは明らかではない。しかし、こうした考え方は、心の問題（心理学）を神経系の分子の運動の問題（生理学）に帰着させようとするハックスリの次のような主張と完全に符合する。“[T]he key to the comprehension of mental operations lies in the study of the molecular changes of the nervous apparatus. . . . [T]he roots of psychology lie in the physiology of the nervous system”⁽⁷⁾。そして、先に言及した“protoplasm”という語は、ワイルドのノートの他の部分にも頻出しているが、当時の心理生理学の言説におけるキー・ワードであった。上に引用したワイルドのメモにもあるとおり、プロトプラズムを、植物と動物に共通する生命の基本的物質であると主張したのは、ドイツの解剖学者 Max Schultze (1825–74) である。しかし、当時のイギリスでこの語を広めることに貢献したのは、ハックスリが1869年に雑誌に発表した“On the Physical Basis of Life”という論文である。この論文をきっかけとして、いわゆる機械論者 (mechanist) と生氣論者 (vitalist) とのあいだで論争が行われた。この論争は、物質と生命・精神との問題をめぐって形成された当時の科学的言説のありようを典型的に表しているのも、この論争の中身を簡単に見ておきたい⁽⁸⁾。

ハックスリの論文の特徴は、プロトプラズム理論をわかりやすく解説している点だけではなく、この理論を、生命の根拠を非物質的なものに置く生氣論 (vitalism) を否定するものとして提示した点にある。

I can discover no logical halting-place between the admission that such is the case, and the further concession that all vital action may . . . be said to be the

result of the molecular forces of the protoplasm which displays it. And if so, it must be true . . . that the thoughts . . . are the expression of molecular changes in that matter of life which is the source of our other vital phenomena.⁽⁹⁾

このように、あらゆる生命、ひいては人間の意識や思考をまでもプロトプラズムの分子の変化に還元しようとするハックスリに対して、ロンドンの外科医 Lionel Smith Beale (1828-1906) は激しく反論した。ビールの反論を一言でまとめれば次のようになるだろう⁽¹⁰⁾。プロトプラズムは、熱によって変質しても相変わらずプロトプラズムだが、生命と非生命、“living matter” と “non-living matter” との間には超えられない一線がある。“living matter” は自己組織化を行うのであり、それを可能にするのは生命の力 (vital power) である。こうして、生命の根拠は非物質的な “vital power” にあると論じるビールと、生命を生命たらしめているのはプロトプラズムという物質であると主張するハックスリは、鋭く対立することになる。Gerald Geison によれば、同時代の多くの科学者たちは、物質と生命の問題に関して、ハックスリとビールを両極として、その中間に位置していたようだ。すなわち、生命の本質を、非物質的で霊的な存在に求めるわけにはいかないが、そうかといって、物質をいくら分析しても生命そのものは捉えられないのではないか、という見解を持つ科学者が多数派であったということである。次に引用する *Oxford Notebooks* のメモは、ワイルドがプロトプラズム理論に興味を示しながらも、上記の中間派の科学者たちの懐疑主義的傾向を共有していたことを示している。

On the whole it is interesting to note that while modern scientists object to any conception of the soul as a spiritual entity which can be thrown out of the window, or a ghostly . . . telegraph clerk sitting inside the brain, they are not prepared to assert that thought is coextensive with molecular action. (CN, 61, 63)

ここで注目すべきは、学生時代のワイルドが、心理生理学に興味を示す一方で、精神と物質、自我と非自我の対立が弁証法的に揚棄され、両者が絶対精神として統一されることを説くヘーゲル哲学にも高い関心を寄せていることである⁽¹¹⁾。

The great difficulties of philosophy have their root in unphilosophical conception of ‘mind’ and ‘matter’ as self-subsistent entities. . . . [T]o the true

idealistic and speculative reason the object and the subject, the Ego and Non-Ego are really one, and . . . are harmonised in the “Original synthetic Unity” which is God . . . the Absolute Idea. (CB, 105)

Oxford Notebooks から判断するにすぎず、ワイルドがヘーゲル哲学を学んだのは、ヘーゲル学者である William Wallace (1843-97) と、プラトン学者として名高い Benjamin Jowett (1817-93) の著作を通してである⁽¹²⁾。ウォレスは、ヘーゲルの『論理学』を英訳し、これに「プロレゴメナ」と題した200頁近くになる解説をつけている。上の引用もそうだが、ワイルドがヘーゲルについてノートをとっているのは、主にこの解説の部分からである。ヘーゲル哲学に関するノートは、どれも似たような内容であり、精神と物質、自我と非自我が “the Original Synthetic Unity” や “the Absolute Idea” に総合されるという、ウォレスを経由したヘーゲル哲学の趣旨が繰り返されている。このように同じような内容のノートが繰り返されとられている事実から、精神と物質の対立を観念論的に総合するという考え方にワイルドが極めて高い関心を寄せていたことがわかる。

これまで述べてきたことから、少なくとも次のようなことがいえる。すなわち、学生時代のワイルドは、精神と物質の二元論を機械論的または唯物論的に総合しようとする、当時の最先端の科学 (心理生理学) の知見に通じていながら、それに対して懐疑的な態度をとっていた。他方で、ヘーゲル哲学を通じて、精神と物質の対立を観念論的に総合しようとする方向性にも強い関心を抱いていた、ということである。当時のワイルドの中に、唯物論的科学と弁証法的観念論が共存していたといえるだろう。実際、絶対精神あるいは世界史の理念の自己発展を説くヘーゲル哲学は、当時の支配的な科学的言説すなわち進化論と親和性の高いものであると見なされていた。イギリスにおけるヘーゲル受容に関するこうした傾向は、次のワイルドのノートからもうかがえる。“Hegelian dialectic is the natural selection produced by a struggle for existence in world of thought” (CB, 204)。しかし、こうしたことから、ワイルドは精神と物質、魂と身体の二元論を観念論的に総合する方向に向かった、あるいは、還元主義的科学とヘーゲル哲学を総合する方向に向かった、と結論づけるのはやや性急だろう。なぜならば、以上のような文脈を踏まえたうえで読むと、作家としてデビューしてからのワイルドのテキストには、魂と身体を総合・統一する可能性とその不可能性が并存しているように思えるからだ。

上記のような並存を最もわかりやすく示しているのは、当時の心理生理学の言説が大きな影響を与えている *The Picture of Dorian Gray* (1891) である。この小説において、心理生理学や心身問題が言及されている箇所は枚挙にいとまがないほどだが、一つだけ引用しておきたい。これは、Henry 卿の内的独白といった部分である。

Soul and body, body and soul — how mysterious they were! There was animalism in the soul, and the body had its moments of spirituality. . . . Was the soul a shadow seated in the house of sin? Or was the body really in the soul, as Giordano Bruno thought? The separation of spirit from matter was a mystery, and the union of spirit with matter was a mystery also. He [Lord Henry] began to wonder whether we could ever make psychology so absolute a science that each little spring of life would be revealed to us. . . .⁽¹³⁾

ヘンリー卿の説く新ヘドニズムには、魂と身体に関するこうした心理生理学的な省察が含まれており、ヘンリー卿はこのような省察を実証するためにドリアンを実験材料にする。そしてドリアンは、ヘンリー卿に吹き込まれた新ヘドニズムを実践し、身体的感覚を精神化すること (the spiritualizing of the senses) を目指す。しかし、その実践に熱中すればするほど、鏡に映る若さを保つ身体と、画像に表象された汚れていく「魂」とは乖離していったのであり、両者を一致させようとしてドリアンが象徴的自殺を遂げた後でさえ、元に戻った美しい画像 (魂) と醜く老いた死体 (身体) は分裂したままだったのだ。以上のように、*The Picture of Dorian Gray* の物語世界には、「魂」と身体を総合・統一しようとする方向性とその総合の不可能性とが分裂したまま並存していることがわかる。いいかえるならば、「魂」は、心身二元論における身体の対立項を表していると同時に、身体=物質と統一されるべきもの、つまり物質化した「魂」(あるいは精神化した身体) となるべきものとして提示されているのである。

The Picture of Dorian Gray とほぼ同時期に執筆された “The Soul of Man Under Socialism” においては、一見したところ心理生理学の影響は見られない。しかし、このテキストにおける “soul” という語の用法、意味を仔細に検討すると、この語に心理生理学的唯物論が反映されていることがわかる。“soul” という語はこのテキストの中で 13 回使われており、これらの部分を通覧すると、当然のことながら、“soul” は一般的な意味での「魂」を表す語として、すなわち、身体に対する精神、外面に対する内面を意味する語として用いられていることが確認できる。そ

れはたとえば次のような箇所である。“There is the despot who tyrannises over the body. There is the despot who tyrannises over the soul. There is the despot who tyrannises over the soul and body alike”.⁽¹⁴⁾ しかし、“soul” という語が使われている部分に注意しながらテキスト全体を読むと、この語が、たんなる内面や精神ではなく、外に向かって “realise” されるべきもの、外部と調和し総合されるべきもの、つまり、外部において表現されるべき “personality” とほぼ同じ意味で用いられていることに気づく。そして重要なことは、次の引用が示しているように、“soul” は音や文字として外面化され物質化されることによって意味を持つ、とされている点である。

[H]e who would lead a Christlike life is he who is perfectly and absolutely himself. He may be a great poet, or a great man of science. . . . It does not matter what he is, as long as he realises the perfection of the soul that is within him. . . . But he was not more Christlike than Wagner when he realised his soul in music; or than Shelley, when he realised his soul in song. (266)

したがって、“The Soul of Man Under Socialism” において、“soul” という語は二重の意味で用いられていることになる。つまり、精神と身体、内面と外面という二項対立のたんなる一方の項としての “soul” と、完全に “realise” され外面化されるべき “soul”、すなわち、精神と身体、内面と外面という対立の調和・総合にまでいたるべき “soul”、この二つの意味で用いられているということである。

ワイルドのテキストにおいて、内面と外面という対立の調和・総合という主題は、*De Profundis* にいたるまで一貫している。たとえば、“The Critic as Artist” には、“that fine correspondence of form and spirit which is the only thing that can satisfy the artistic and critical temperament.” という一節があり、外面 (形式) と内面 (精神) とのコレスポンドが芸術家=批評家の理想とされている⁽¹⁵⁾。そして *De Profundis* においても、“What the artist is always looking for is the mode of existence in which soul and body are one and indivisible: in which the outward is expressive of the inward; in which Form reveals.” と述べられ、“soul and body” の総合が理想として説かれている⁽¹⁶⁾。とすると、ヘーゲルに直接言及している “The Rise of Historical Criticism” (1879) から *De Profundis* にいたるまで、ワイルドはその作家生活を通して、ウォレスやジョウイットを介してイギリスに輸入されたヘーゲル哲学の圧倒的な影響下にあったというべきなのだろうか。ワイルドもノートをとっていたように、ヘーゲルの弁証法的観念論では、内面と外面の対立

が最終的に理念あるいは絶対精神に総合され、絶対精神から再び内面と外面が分化してくる、とされるのだから。

しかし、先に指摘した“The Soul of Man Under Socialism”における二番目の意味での“soul”（精神と身体、内面と外面という対立の調和・総合にまでいたるべき“soul”）と、ヘーゲルにおける“the Absolute Idea”とのあいだには、微妙だが決定的な違いがある。第一に、この二番目の意味での“soul”は、すでに見たように、その対立項との調和にいたったとしても、あくまでも音（声）や文字という具体性（物質性）に規定されているということだ。この意味での“soul”は純粹に非物質的なものではなく、こういってよければ、あくまでも具体性（物質性）にとりつかれているのである。繰り返せば、ワイルドにおいて「魂」（内面）は外面化され実現されるべきものだった。いいかえると、物質（外面）との調和にいたっていない「魂」、すなわち物質にとりつかれていない「魂」は未だ真の意味での「魂」ではない、というパラドクスが見られるのである。第二に、“soul”は完全に“realise”され外面との調和にいたるべきものなのだが、こうした「調和」が理想として高らかに謳われるほど、かえってその実現不可能性が際立ってしまうということである。（この点は、*The Picture of Dorian Gray* はもちろん、“The Critic as Artist”や*De Profundis*においても同様である。）“The Soul of Man Under Socialism”を、ワイルドは次のように締めくくっている。

When man is happy, he is in harmony with himself and his environment. The new Individualism, for whose service Socialism, whether it wills it or not, is working, will be perfect harmony. . . . It will be complete, and through it each man will attain to his perfection. The new Individualism is the new Hellenism. (289)

この一節における“perfect harmony”、“perfection”という語句は、“soul”が完全に“realise”され外面との調和に達した状態を指しているが、こうした「調和」はユートピアにおいてのみ実現可能である（つまり現実には実現できない）と解釈せざるをえない。「調和」すなわち“soul and body”の総合は、ここにおいても*The Picture of Dorian Gray*の場合と同様、その可能性と不可能性が並存しているのだ。“The Soul of Man Under Socialism”においても、ヘーゲル哲学は影響力を行使しているか見えながら、明らかに機能不全に陥っている。

既述したように、学生時代のワイルドは、プロトプラズム理論等の心理生理学

の知見を吸収しつつ、そうしたラディカルな唯物論を懐疑してもいた。本来は唯物論的であるはずの科学者の多くにも共有されていたこの懐疑は、「魂」の問題が神経系の分子（物質）の運動の問題に還元されてしまうことに対する不安でもあっただろう。ワイルドがヘーゲル哲学に強い関心を示したのも、こうした不安を解消するため、いいかえると、魂と身体との対立を（唯物論的に総合するのではなく）観念論的に「揚棄」するためであったと考えられる。しかし、“The Soul of Man Under Socialism”等のテキストが実際に示しているのは、解消されずに残ったこの不安の痕跡である。ワイルドにおいて、「魂」の純粹性はつねに物質によって「汚染」されている。それはいわば、心理生理学的・プロトプラズム的な「魂」なのだ。とするならば、「魂」の問題は物質の問題、ひいては経済的下部構造の、そして「物質的イデオロギー装置」の問題でもあるだろう⁽¹⁷⁾。ここにおいて“soul”と“Socialism”は交差する。この両者が交差する地点を、ワイルドは“the new Individualism”と呼んでいるのである。したがって、“The Soul of Man Under Socialism”は、物質に対する精神の、政治に対する芸術の優位を説いているのではない。そこで示されているのは、「魂」の問題を考えることは「世俗」（政治、経済、科学技術等々）の問題を考えることと等価である、ということなのだ。以上のように、少なくともワイルドにおいては、世紀末の唯美主義、芸術至上主義は「世俗」の問題と切り離すことができない。両者のつながりを断ち切るという解釈行為、すなわちワイルドのテキストを「浄化」というもっぱら審美的な解釈行為は、そうする者の「不安」を表しているだけだ。その「不安」の内実を明らかにするには、また別の分析を必要とするだろう。

（本稿は、第27回ワイルド学会秋季大会〔2002年11月30日、東京農業大学世田谷キャンパスにて開催〕におけるシンポジウム「21世紀のオスカー・ワイルド——ワイルド文学の可能性を探る」で読まれた原稿に基づいている。）

注

- (1) Roy Porter, “Barely Touching: A Social Perspective on Mind and Body,” *The Language of Psyche*, ed. G. S. Rousseau (Berkeley: U of California P, 1990) 45-80.
- (2) Janet Oppenheim, *The Other World: Spiritualism and Psychical Research in England 1850-1914* (Cambridge: Cambridge UP, 1985). [ジャネット・オッペンハイム、『英国心霊主義の抬頭』、和田芳久訳、工作舎、1992年]。

- (3) Jonathan Crary, *Techniques of Observer: On Vision and Modernity in the Nineteenth Century* (Cambridge: MIT Press, 1992). [ジョナサン・クレイリー、『観察者の系譜』、遠藤知巳訳、十月社、1997年]。クレイリーのいう視覚の身体性に対しては、次のような精神分析の側からの批判がある。Joan Copjec, *Imagine There's No Woman: Ethics and Sublimation* (Cambridge: MIT Press, 2002).
- (4) ここでは以下の文献だけをあげておきたい。Walter E. Houghton, *The Victorian Frame of Mind, 1830-1870* (New Haven: Yale UP, 1957); James Paradis, and Thomas Postlewait, eds., *Victorian Science and Victorian Values: Literary Perspective* (New York: The New York Academy of Sciences, 1981); George Levine, ed., *One Culture: Essays in Science and Literature* (Wisconsin: U of Wisconsin P, 1987).
- (5) 例外的にこうした視点からワイルドを論じたものとして、次の2本の論文がある。Bruce Haley, "Wilde's 'Decadence' and the Positivist Tradition," *Victorian Studies* 28 Winter 1985: 215-229; Christine Ferguson, "Decadence as Scientific Fulfillment," *PMLA* 117 (2002): 465-478. また、次の文献は、心身問題と文学のかかわりを考えるうえで参考になった。石塚久郎、鈴木晃仁編、『身体医文化論-感覚と欲望』、慶應義塾大学出版会、2002年。
- (6) Philip E. Smith and Michael S. Helfand, eds., and commentary, *Oscar Wilde's Oxford Notebooks: A Portrait of a Mind in the Making* (New York: Oxford UP, 1989). ここにはワイルドがとった2種類のノートが収められており、編者はそれぞれを"Commonplace Book"および"College Notebook"と呼んでいる。(以下、編者に倣って2種類のノートをCB、CNと略記する。また、ここから引用する場合は、引用後本文中にノートの番号[たとえばCB, 17のように]を括弧内に記す。)これらのノートの執筆年代は確定されていないが、編者によれば、CBが1878年頃~79年頃、CNが1874年頃~76年頃と推定される。また、編者はこれらのノートにおけるメモのソースをできる限り調べ上げており、大変有益である。クリフォードとティンダルの著作については、以下を参照した。(ハックスリの著作については後の注で示す。) William Kingdon Clifford, *Lecture and Essays*, 2 vols. ed. Leslie Stephen and Frederick Pollock (1879; London: Macmillan, 1901); John Tyndall, *Fragments of Science*, 2 vols. (New York: Appleton, 1897).
- (7) Thomas Henry Huxley, *Hume* (1887; New York: AMS Press, 1968) 78-80.
- (8) この論争については、次の論文に多くを負っている。Geison, Gerald L. "The Protoplasmic Theory of Life and the Vitalistic-Mechanist Debate," *Isis* 60 (1969): 273-92. また、後期ヴィクトリア朝における生理心理学を概観するには、次の論文が有益である。Lorraine Daston, "British Responses to Psycho-Physiology, 1860-1900," *Isis* 69 (1978): 192-208.
- (9) Thomas Henry Huxley, "On the Physical Basis of Life," *Method and Results* (London: Macmillan, 1893) 130-65.
- (10) Lionel Smith Beale, *Protoplasm: or Life, Matter, and Mind* (London: J. Churchill & Sons, 1870).
- (11) これはヘーゲルに対する教科書的・通俗的解釈だが、*Oxford Notebooks*を読むかぎり、ワイルドはこのようにヘーゲルを理解していたと判断できる。本稿で「ヘーゲル(哲学)」という場合は、ワイルドの時代に教科書的に解されたヘーゲルを指している。しかし、ヘーゲルのテキスト自体はもちろんこれほど単純ではない。ヘーゲルに対する近年の読解で興味深いものとしては、私見の及ぶ範囲では、Slavoj Žižekの一連の仕事、特に *Tarrying with the Negative: Kant, Hegel, and the Critique of Ideology* (Durham: Duke U. P., 1993) [スラヴォイ・ジジェク『否定的なもののもとへの滞留』酒井隆、田崎英明訳、太田出版、1998年]がある。
- (12) ウォリスとジョウイトについては、次の著作を参照した。William Wallace, *The Logic of Hegel* (Oxford: Clarendon Press, 1874); Benjamin Jowett, *The Dialogues of Plato*, vol. 4 (1875; London: Macmillan, 1892).
- (13) Oscar Wilde, *The Picture of Dorian Gray*, ed. Donald Lawler (New York: Norton, 1988) 49-50.
- (14) Oscar Wilde, "The Soul of Man Under Socialism," *The Artist as Critic: Critical Writings of Oscar Wilde*, ed. Richard Ellmann (Chicago: U of Chicago P, 1982) 255-289. ワイルドのこのエッセイが書かれた背景を知るには、次の文献が役立つ。J. D. Thomas, "'The Soul of Man Under Socialism': An Essay in Context," *Rice University Studies* 51 (1965): 83-95.
- (15) Oscar Wilde, "The Critic as Artist," *The Artist as Critic: Critical Writings of Oscar Wilde*, ed. Richard Ellmann, 340-408.
- (16) Oscar Wilde, "De Profundis," *The Complete Works of Oscar Wilde*, ed. J. B. Foreman (New York: Harper and Row, 1989) 873-957.
- (17) Louis Althusser, "Ideology and Ideological State Apparatuses (Notes towards an Investigation)," *Mapping Ideology*, ed. Slavoj Žižek (London: Verso, 1994) 100-40. [レイ・アルチュセール「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」、柳内隆訳、『アルチュセールのイデオロギー論』所収、三交社、1993年]。